

# 長期的なキャリア形成を視野に入れた日本語教育 —自己・他者・社会を学ぶ日本語学習の一考察—

トンプソン 美恵子

キーワード：高度外国人材，生涯学習，持続可能性日本語教育，群像，既有知識

## 1. はじめに

2008年、文部科学省他関係省庁により留学生30万人計画が策定され、少子高齢化や日本企業のグローバル化を背景に、高度外国人材<sup>1)</sup>獲得を目指した留学生の受入れが推進されてきた。一定期間日本語を学習後、母国での就職が前提とされた留学生10万人計画時代の「顧客モデル」から、日本での就職と定住を視野に入れた「高度人材獲得モデル」へと政策がシフトしたのである(芹沢, 2012)。早稲田大学においても、2032年までの達成を目指した「留学生1万人計画」<sup>2)</sup>が打ち出され、高度外国人材育成としての留学生教育の拡充が期待される。では、高度外国人材の育成はどのようにになっているのだろうか。

高度外国人材の育成は緒についたばかりだが、2007～2013年に経済産業省と文部科学省が実施したアジア人財資金構想はその代表例だろう<sup>3)</sup>。この事業の下、ビジネス日本語能力の養成、ビジネス文化・知識の理解、社会人としての行動能力の養成などを盛り込んだ日本語教育が採択大学で展開された。金原(2008)はこの事業を企業のニーズを満たす実践的なものと評価しながらも、高度外国人材育成では「教養教育」により焦点を置くことが大学の使命だと主張する。具体的には、グローバル化社会でよりよく生きることへの主体的な姿勢、そのために多様な他者を受け入れる力、生涯新しい知識を獲得し、統合していく力などの育成などを提案している。

他方、高度外国人材の育成、受入れには課題も多い。留学生の日本での就職者数は2014年時点で12,958名と過去最高ではあるものの、就職希望者の3割程度に過ぎず、その原因は日本語力や就職活動・日本企業に関する情報の不足にあるという(文部科学省, 2016)。また、就職の入口部分に加え、就職後の課題もある。留学生の平均勤続年数は3年以内が約3割、5年程度が約4割と比較的短い(新日本有限責任監査法人, 2015)。高度外国人材の「獲得」に加え、長期的な視点での「育成」を考える必要があるだろう。

この点において金原(2008)が提案するように、いわゆるビジネス日本語教育を超え、人生の長期的な展望の見出しを視野に入れた教養教育を日本語教育で実現させることが有効ではないかと考える。状況がめまぐるしく変動するグローバル化社会においては、大学進学や就職が人生の安定を保障するとは限らない。上述のように、3年以内に離職する留学生も少なくない。社会に出る前に就労や人生をめぐる自身の価値観やビジョンを考え、キャリアを長期的に捉える機会を日本語教育の場において設けることは、留学生の生涯学習を支える日本語教育を可能にするのではないだろうか。

## 2. 本稿の目的

そこで本稿は、留学生の長期的なキャリア形成を視野に入れた日本語教育の試案として、早稲田大学日本語教育研究センター（以下、CJL）で筆者が担当するテーマ科目<sup>4)</sup>「事例から学ぶグローバル化社会と私7-8」<sup>5)</sup>の実践を記述していく。

なお、金原（2008）が提案した教養教育を展開すべく、当該科目では持続可能性日本語教育（岡崎，2009）に依拠して授業デザインを行った。持続可能性日本語教育とは、自己を起点としてグローバル化社会での人・モノ・コトの関係を能動的に把握し、その関係の中に生きる当事者としてよりよく生きるための展望を見出す力、その過程で多様な他者と対話し、学びあう力を醸成する内容重視の日本語教育である。持続可能性日本語教育は学部の教養教育に応用されたこともあり（鈴木・トンプソン，2013），グローバル化社会を生きる上での教養の滋養に資すると考え、参考にすることとした。

## 3. 実践の概要ーテーマ科目「事例から学ぶグローバル化社会と私7-8」

### 3-1. 受講生

2014年度秋学期に筆者が設置したCJLのテーマ科目「事例から学ぶグローバル化社会と私7-8」は、上級から超級を対象としている。履修者数は学期によって異なるが、10～20名程度である。このうち、いずれの学期も1、2割の受講生が就職活動中であった。

受講生の特徴は多様性である。受講生はCJLで日本語を半期または1年学ぶ者に加え、学部留学生、大学院留学生、日本語を第一言語としない日本人の学部生など、その所属は多岐に渡る。これまで履修した学生の国籍も日本、中国、台湾、韓国、モンゴル、シンガポールなどのアジア圏、ロシア、ベラルーシ、ドイツなどのヨーロッパ圏、アメリカ、エジプトなど様々であった。また、複数の民族ルーツを持っている、複数の国・地域で教育を受けた、社会人経験を数年有するなど、受講生の背景も多様である。このように、この授業自体がグローバル化社会の縮図であり、多文化の人々で構成されている。

### 3-2. 授業の目標と方針

この授業では、日々変化するグローバル化社会での問題に対し、受講生が自分を出発点として考えることで、思考を深める言語使用を目指す。授業目標は以下3点である。

- 1) グローバル化社会で起きていることを当事者の視点から考える。
- 2) グローバル化社会における問題と自分や身近にいる人々とのつながりを見出す。
- 3) グローバル化社会での「生き方」に対する考えを更新し続ける思考力を身につける。

これらの授業目標の下、ドキュメンタリー映像に登場する人々の事例、すなわちグローバル化社会を生きる「群像」を通じ、グローバル化社会の問題と自己を関連付けて考えることを促す。これは、グローバル化社会における問題が他人事となりがちという開発教育での課題（岡崎，2009）を受けている。具体的には、グローバル化社会での大きな問題に対し、事例を巡る人々と自分やその家族、消費者・生産者・小売業者など、複眼的な視点から検討するとともに、グローバル化社会の動きや構造を俯瞰する。そして、自己・他

者・社会の関係を考えるらせん的なプロセスの中で、グローバル化社会でどのように働きたいか、家族とどのように過ごしたいか、自分の生活を豊かにするにはどうということかなど、職業に加え人生を包括した自己のキャリア形成に対し、展望を見出していく。

このプロセスでは、多くの受講生にとって最大の関心事である就職や起業に向けた思考と姿勢を醸成することも狙いとしている。例えば、この一連のプロセスは、就職活動の一環として行われる自己分析の側面を持つ。また、就職試験や社会人生活に備えた世界情勢の把握、そのための情報収集力や批判的思考力の鍛錬としても位置付けられる。この授業の目標を達成し、長期的な視点から未来の展望を見出す力を身につけることは、就職などの直近のキャリア形成につなげることも可能だと考えている。

### 3-3. 方法

以下、この授業において特に工夫した方法、1) 学習サイクル、2) 段階的な問い、3) 4つの問い（岡崎，2009）について述べる。

#### 3-3-1. 学習サイクル

この授業では、図1のような学習サイクルを作った。

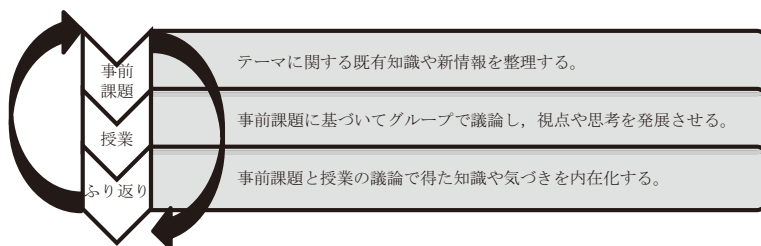


図1 「事例から学ぶグローバル化社会と私 7-8」における学習サイクル

まず、事前課題では、授業で扱うテーマに関する既存知識、自己や知人の経験を思い出して整理するとともに、記事の読解や調べ学習を通じて新たな情報を得る。この事前課題で得られたスキーマに基づき、授業の議論では様々な意見、経験、情報をペアやグループで共有し、受講生は各自の視点や思考を発展させる。そして、授業終了直前または終了後、事前課題と授業の議論で得られた知識や気づきを既存知識・経験と有機的に結びつけ、未来の行動につなげていくために、ふり回りを書く。ふり回りの観点は以下の通りである。

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 授業で扱ったテーマについて考えたことや気づいたこと、思い出した自分の経験</li> <li>2) ディスカッションを通じて自分やクラスメートについて気づいたこと</li> <li>3) 今後調べてみたいと思ったこと、実行してみたいと思ったこと</li> </ol> |
|--|

受講生のふり回りには毎回筆者がコメントを書く。そして、授業の冒頭で前回授業の主なふり回りの内容を共有し、‘ふり回りのふり回り’を行う。

授業の各回で事前課題シート、教室活動シート、ふり回りシートに調べたことや考えた

こと、気づいたことなどを書き、シートの蓄積はポートフォリオとしてまとめていく。そして、一連の学習サイクルが可視化されたポートフォリオを見ながら、授業の最終回に総合的ふり返りを行う。こうして、事前課題・授業での議論・ふり返りの学習サイクルの中で、受講生は自分が過去に培った知識や経験を確認しながら、新たな知識や多様な意見・視点を取り込み、将来グローバル化社会でいかに生きていくための展望を見出す。

### 3-3-2. 段階的な問い

思考の深化を促すために、事前課題や授業の議論では、段階的な問いを提示した。例として、第4回「グローバル化社会で働く (1)」で提示した問いを表1に示す。まず、事前課題で留学生30万人計画骨子に目を通し、受講生の意見や想起される自分または知人の経験を問うことで、留学生30万人計画に関する情報を受講生の経験と結びつけ、彼らが政策を身近に感じるよう促す。授業では、留学生30万人計画の影響を受けて来日し、日本で高度外国人材としての就職を目指す人々、その家族や関係者などの事例を紹介し、それぞれの立場から見る留学生30万人計画の現実を考察するための問いを提示する。このように、受講生自身や具体的な群像と関連付けながらグローバル化社会を考える段階的な問いを設定し、グローバル化社会に生きる当事者として諸問題に向き合うことを促す。

表1 第4回授業で提示した問い

事前課題	文部科学省による留学生30万人計画骨子を読み； 1) 考えたこと、気づいたことや思い出した自分・知人の経験、 2) 疑問に思ったこと、もっと知りたいと思ったことなどを書いてください。
授業の議論	1) 日本で就職したい留学生やその家族は、留学生30万人計画をどう考えるでしょうか 2) 留学生を雇用する企業は、留学生30万人計画をどう考えるでしょうか。 3) (ドキュメンタリー視聴後) 日本で就職活動に苦しむ大学院留学生の陳さんに共感したこと、聞いてみたいと思ったことを挙げてください。 4) 香港で娘を案じる陳さんのお母さん、就職支援会社の浅井さんはどうでしょうか。 5) 事前課題で考えたこと、疑問に感じたことを改めて考えてください。新たな気づきや疑問はあるでしょうか。

### 3-3-3. 4つの問い

3-2で挙げた授業目標の達成を促すために、持続可能性日本語教育の根幹をなす「4つの問い」(岡崎, 2009)を受講生に提示し、数回その答えを問い、共有と検討を行う。また、15回分授業の全体的な流れや各回の授業計画を練る際、「4つの問い」の観点を参考にしていく。「4つの問い」を以下に示す。

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>① 世界認識：グローバル化社会はどうなっているか</li> <li>② 行動基準：そこでどのように生きていくか</li> <li>③ 人間関係：②のためにどのような人間関係を作っていくか</li> <li>④ 自己アイデンティティ：そのように生き、人間関係を作る私とは何か</li> </ul> |
|--|

「4つの問い」に答えることは、グローバル化社会の現状を把握し、他者とよりよい関

係を築きながら、自分なりに生き方の展望を見出すことを促す。そして、「4つの問い」の答えを更新・鍛錬していくことが、継続的な知識の獲得と主体的な学びにつながる。つまり、「4つの問い」を授業で考えることは、教育機関での修学を終えた後、岐路に立たされた時に再び「4つの問い」を自問自答し、最良の選択をするための訓練と言える。

### 3-4. 授業内容

主な活動を付記した授業内容を表2に、表2を大きなテーマに分けた授業展開を図2に示す。授業では、「雇用」と「食」のテーマを順に扱い、グローバル化社会での生き方を追求する「4つの問い」を検討する回を挟み込む構成としている。

表2 「事例から学ぶグローバル化社会と私7-8」授業内容（2016年度春学期）

テーマ（冒頭数字は授業回）	主な内容（下段は主な活動）
① オリエンテーション	グローバル化社会で生きるための目標を設定する ポートフォリオ目標設定シート作成
② グローバル化社会と私（1）	グローバル化社会とそこで生きる私をふり返る 私の人生マップ作成・共有
③ グローバル化社会と私（2）	幸福とは何か、幸福を支えるものは何かを考える 私の幸福論・人生の溜めチャート共有
④ グローバル化社会で働く（1）	留学生30万人計画と留学生の就職活動を考える ドキュメンタリー視聴 & ロールレタリング
⑤ グローバル化社会で働く（2）	就職氷河期に大学を卒業した日本人の働き方を考える ドキュメンタリー視聴 & 対話的問題提起学習
⑥ グローバル化社会で働く（3）	新富裕層の働き方と幸福論を考える ドキュメンタリー視聴 & 対話的問題提起学習
⑦ グローバル化社会と働く人々の関係（1）	人々が働く社会でのマネー、資本、流通について知る キーワードプロジェクト、つながりの図グループ作成
⑧ グローバル化社会と働く人々の関係（2）	グローバル化社会をマクロ・ミクロな視点で分析する つながりの図グループ発表
⑨ 様々な地域でのグローバル化社会と「雇用」	よく知る国・地域の雇用事情を報告・共有する 各国・地域の記事を紹介し、共通点・相違点を分析
⑩ グローバル化社会で生きる私	グローバル化社会でいかに生きるかを考える 「4つの問い」共有
⑪ 私たちの生活を支える食（1）	食を生産者の観点から考える ドキュメンタリー視聴 & ロールレタリング
⑫ 私たちの生活を支える食（2）	食を消費者・生産者・多国籍企業の観点から考える ドキュメンタリー視聴 & 三者のつながりを分析
⑬ 新たな生き方を考える（1）	第6次産業に従事する人々の働き方と生き方を考える ドキュメンタリー視聴、新たな生き方と「4つの問い」再考
⑭ 新たな生き方を考える（2）	グローバル化社会における新たな生き方の事例を発表する 事例の個人発表
⑮ まとめ	グローバル化社会とそこで生きる私を改めてふり返る 総合ふり返りレポート作成、ポートフォリオふり返り



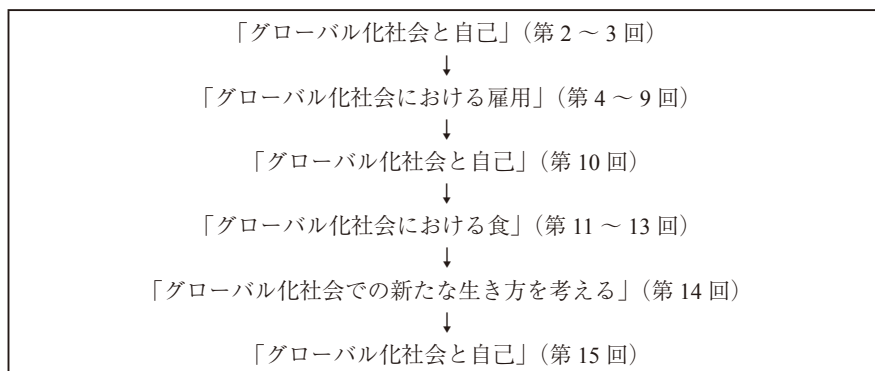


図2 「事例から学ぶグローバル化社会と私7-8」授業展開の流れ

「雇用」および「食」のテーマを扱うのは、いずれもグローバル化社会での人・モノ・コトの動きやそこでの問題を如実に反映しているためである。例えば、「食」においては、私たちは消費者として日々多様な国・地域に触れており、その背後には、生産者・小売業者の存在がある。つまり、「食」の流通はすなわちグローバル化社会の動きだと捉えられる。以上のことから、「雇用」と「食」のテーマを扱うことで、グローバル化社会の現状を知り、そこでのよりよい生き方を追求することが可能と考えた。

以下、2016年度の受講生21名によるふり返りと成果物を一部示しながら、授業内容の詳細を見ていく。なお、ふり返りの記述は受講生が書いた原文のまま斜体で示す。

### 3-4-1. 第2～3回：グローバル化社会と自己

まず、グローバル化社会の諸問題について検討していく起点を確認するため、グローバル化社会で生きてきた自己をふり返る時間を設けた。

第2回では、これまでの人生をふり返る「人生マップ」の作成・共有を行った。「人生マップ」とは幸福の度合いを縦軸に、年齢を横軸に設定し、人生を曲線グラフで描いたものである(図3)。ふり返りでは、「以前は小学校時代に中国に行ったことが、当時の自分にとってはあまり良くない思い出であり、比較的不幸せだと感じていました。しかし、今ではそれが自分という人間を作った大きなターニングポイントで、非常に素晴らしく、必要不可欠な過程だったと考えています。(学部2年生・日本)」など、過去の否定的な考えを捉え返し、肯定的に意味づける記述が多く見られた。また、「留学は個人的な選択に見えるが、(中略)リーマンショックの影響で、台湾の失業率が高まっていた。その時に留学した方が将来仕事を探しやすいかと思って、留学することに決めた。(学部4年生・台湾)」など、自分の意志が社会の動きに影響を受けているというふり返りもあった。

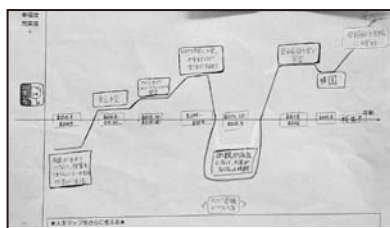


図3 人生マップ

第3回では、自分の幸福に対する価値観を知る「幸福論」「溜めチャート」を作成・共有した。「幸福論」は「何をしている時、誰と一緒にいる時幸福を感じるか」など自分なりの幸福論を事前課題に課した。それを授業で共有した後は自分の幸福を支え

ているお金、精神、人間関係などの生活の基盤となる‘溜め’（湯浅，2010：45）がどの程度あるかについて考える「溜めチャート」を作成した。ふり返りで多かったのは、以下のように、自分の環境やそれを整えてくれた家族に対する感謝である。「大学に入学した時、両親に『子どもがエリートになれるようにこの4年はしっかり努力する』と豪語した。2年生の頃、『五体満足』というキーワードを授業で見、親の気持ち少し理解できた。自分が無事で生きてきたことこそ、本当の幸福だ。（学部3年生・中国）」

### 3-4-2. 第4～10回：グローバル化社会における「雇用」を中心に

次に、7回かけてグローバル化社会における「雇用」をテーマとして扱った。第4回は香港の大学院留学生（ドキュメンタリー『就職前線異状あり!? 外国人留学生の就活』）、第5回は1997年の就職氷河期に大学を卒業した2009年当時35歳の4名（ドキュメンタリー『NHKスペシャル：35歳を救え』）、第6回は節税のためシンガポールに移住した新富裕層のデイトレイダー（ドキュメンタリー『新富裕層 vs. 国家～富をめぐる攻防』）などの群像を通じ、人々の働き方や生活からグローバル化社会を考察した。

例えば第4回では、香港の有名大学を卒業し、中国語に加え英語も堪能な大学院留学生の陳さんが、60社以上の企業をエントリーするも、日本語のアクセントなどの問題で内定がないという事例をめぐる、議論を行った（議論の内容は、表1）。その後、「ロールレタリング（役割書簡交換法）」（岡本，2012）の活動の中で、陳さん、陳さんのお母さん、就職支援会社の浅井さんのいずれかに宛てて共感したこと、尋ねたいと思ったことなどを書き、ペアで共有後選んだ人物になりきって自分が書いた手紙への返信を書く、という活動を行った。ふり返りでは、政策と企業の温度差や留学生と企業のミスマッチへの指摘が多く見られた。一例を示す。「留学生は高度人材の大きな供給源となると思います。一方、（中略）留学生自身がどういった前提で日本に留学したいと思っているのかも考えるのが大事だと思います。卒業後日本で就職したい方がたくさんいても、受け入れる企業、そして働きやすい環境を整えなければなりません。（20代前半CJL生・ベラルーシ）」また、次にあるように、就職活動中の受講生は陳さんと自分の状況をリンクさせてふり返りを行っていた。「陳さんの悩みにとても共感できます。色々な留学生向けの就活支援活動があっても、企業側が留学生に対してそこまで積極的でないと就職活動を通して感じました。自分の日本語能力に自信を持っていても、やはり外国人として日本人と競争しますので、話し方や考え方の違いは非常に目立ちます。（学部4年生・中国）」

第7&8回では、第5および6回の事前課題で調べたグローバル化社会における「雇用」に関するキーワードなどを使ってグローバル化社会の問題や要因を整理し、その構造を可視化する「つながりの図」をグループで作成・発表する活動を行った。事前課題で提示したキーワードは、バブル崩壊、就職氷河期、規制緩和、生涯賃金、終身雇用、新富裕層、不労所得、人材流出などである。第4～6回では人々の生活からグローバル化社会をミクロ的な視点で観察したのに対し、「つながりの図」の活動では、マクロ的な視点でグローバル化社会を俯瞰した（図4）。「つながりの図」の作成手順を以下に示す。

- ① 自分たちに関連付けやすい「雇用」の問題・テーマを決める。例) なぜ留学生は、離職するのか。
- ② ①で挙げたテーマを中心に書く。
- ③ キーワードを用い、原因・影響などを考える。
- ④ キーワード間の「つながり」を考え、線で結ぶ。
- ⑤ ④に授業で触れた群像の生活状況を入れ込む。



図4 つながりの図

ふり返りでは、「バタフライ効果を覚えだした。ブラジルで蝶が羽ばたいたことが原因で中国では嵐になることで、社会的な規模になっても同じと思う。世界の投資-日本のバブル-国営企業の運営-伊東さん（第5回授業で扱った群像の一人）という流れで、最後に影響したのは伊東さんだ。（学部4年生・台湾）」など、グローバル化社会での出来事が個人にまで影響を及ぼすことを実感したものが目立った。また、「世界の情勢を他人事と思わず、自分に及ぶリスクを察知する能力が必要です。伊東さんの場合、JALという名前に惹かれて働き始めたかもしれませんが、大企業も中小企業と同じく破綻のリスクを抱えています。（学部1年生・日本）」など、現状を分析し、リスクにどう向き合うかを思案する記述も多くあった。

第9回は、出身国・地域の雇用問題に関する記事を各受講生がグループで報告し、各国・地域の共通点・相違点を分析した。そして、第4～9回に考えたグローバル化社会と「雇用」の総括として、第10回では「4つの問い」に対する答えをグループで共有した。

### 3-4-3. 第11～14回：グローバル化社会における「食」を中心に

第11～13回では、グローバル化社会における「食」を扱った。第11 & 12回は、ドキュメンタリー映画『Food Inc.』に登場する契約養鶏農家のキャロルさんを群像とし、食をめぐる消費者・生産者・小売業者の立場から「食」の問題を考えてもらった。この群像についても第4回同様ロールレタリングの活動を行ったが、自分たちが消費している「食」を支える生産者に関する知識がない場合、消費者として手紙の中で質問をしても、生産者の立場に立って返信を書くことが難しいだろうと推測した。そこで、第11回授業で生産者であるキャロルさん宛に往信の手紙を書いた後、手紙に書いた質問への答えを調べた上で、生産者の立場から復信の手紙を書く事前課題を設定した。第12回授業で復信の手紙をペアで共有した後、映画出演後大企業との契約を打ち切られたキャロルさんが、平飼いの有機農法で養鶏農場を経営している現況を映像で見た。

ふり返りでは、「大手企業は消費者たちの健康を無視して、売上を求めめるため、安い原料を使って食品を販売しています。しかし、彼らはいずれ自分が作った食品を食べなければならないので、自分と自分の家族の健康を一切無視しました。（中略）農家たちの状況は50万ドル以上の借入金と平均18,000ドルの年収です。いろいろなデータを見た私は農家の未来を心配しています。（学部2年生・中国）」など、多国籍企業の利益至上主義と人々への影響、生産者の現状に対する憂慮が多く見られた。また、次のように、第3回で



考えた幸福論を改めて考えるものも多くあった。「キャロルさんは正しいことをして、それは多分彼女の「幸せ」だろう。私はアリストテレスのニコマコス倫理学を勉強しました。「幸福」と「善」は必ず関係があります（アリストテレスの引用を省略）。4年も哲学を勉強したが、まだ自分の幸福論が分かりません。でもだんだん気付いたことは倫理を違反した幸福はないと思います。（20代後半 CJL 生・シンガポール）」

第13回では、第六次産業を展開する「もくもく手作りファーム」経営者（木村修・吉田修）を群像とし、「食」を通じてグローバル化社会を変える生き方を考えた。カンブリア宮殿（テレビ東京）を視聴後、群像の「4つの問い」に対する答えを想像し、自分たちの答えを改めて読んだ。ふり返りでは、「第六次産業になると農家などの生産者が作ったものを自ら製品に加工し、価格の設定し、販売まで行い、より大きな利益得ることができるようになった。一方で、モクモクファームを作った人がもともとビジネスの知識がある程度持っていたので、会社の設立ができたが、農業しかやらない人だと、結構難しいと思う。（20代後半 CJL 生・ベラルーシ）」など、新たなビジネスの形に魅力を感じつつも、実現可能性を批判的に吟味し、自身の選択肢として思案している様子が見えられた。

グローバル化社会で新たな生き方を追求する群像を第11～13回で見た後、第14回では事前課題でそのような群像を一人調べ、各受講生がポスター発表を行った。ふり返りでは、「私はお肉を食べることがやめられないと思いますが、（クラスメートの）〇〇さんのようにお肉の量を減らしたいと思います。27年間この地球に暮らし、私の手にも動物の血がいっぱいついています。（20代後半 CJL 生・ドイツ）」「アイディアがあれば、とりあえずやってみた方がいいと思います。（中略）最近家でネギを植えようと考えています。いつもスーパーで145円の長ネギを買いますが、自分が植えるネギはどんな味ですかと気になります。（20代後半 CJL 生・シンガポール）」など、大きな行動ではないが、まずは自分にできることから始めたい、という未来に対する行動の記述が多く見られた。

#### 4. おわりに

第15回の総合ふり返りでは、就職の内定を得た受講生がそこでの働き方を思案する、就職活動を控えた受講生が自分の価値観に引きつけた企業を探すなど、受講生自身の人生とリンクさせ、グローバル化社会で生きる展望を具体的に見出しているのがうかがえた。

本稿では、「4つの問い」に対する答えや語彙などの言語学習には触れることができなかった。受講生の認識に対する縦断的分析および継続調査とともに、今後の課題としたい。

#### 注

- 1) 高度外国人材の定義は定まっていないが、高度人材受入推進会議（内閣府，2009）では、日本の産業にイノベーションをもたらし、専門的・技術的な労働市場の発展を促しながら、日本の労働市場の効率性を高められる優秀な人材と定義されている。日本経済団体連合会（2015）が企業に行ったアンケート調査によると、グローバル事業で活躍できる人材に必要な資質・能力として「海外との社会・文化、価値観の差に興味・関心を持ち、柔軟に対応する姿勢」「既存概念にとらわれず、チャレンジ精神を持ち続ける」「英語をはじめ外国語によるコミュニケーション能力」の順に企業が評価するという。これらをまとめると、

高度外国人材は、専門的知識・技術や語学力に加え、受容力、柔軟性、創造性、積極性などの資質・姿勢を有すると捉えられる。

- 2) 「WASEDA VISION 150」早稲田大学 <http://www.waseda.jp/keiei/vision150/target.html#02> (2016年9月19日アクセス)
- 3) 「アジア人財資金構想」経済産業省 [http://www.meti.go.jp/policy/asia\\_jinzai\\_shikin/](http://www.meti.go.jp/policy/asia_jinzai_shikin/) (2016年9月23日アクセス)
- 4) CJLの留学生科目には、4技能をバランスよく学ぶ総合科目と独創性の高いテーマについて学習するテーマ科目がある。
- 5) 科目名の末尾にある数字はレベルを示し、1～8までである。1が初級、8が超級である。

## 参考文献

- 岡崎敏雄 (2009) 『言語生態学と言語教育—人間の存在を支えるものとしての言語』 凡人社
- 岡本茂樹 (2012) 『ロールレタリング—手紙を書く心理療法の理論と実践』 金子書房
- 金原奈穂 (2008) 「日本企業のグローバル化と留学生教育の方向性」『群馬大学留学生センター論集』 8, 31-44.
- 新日本有限責任監査法人 (2015) 「平成26年度産業経済研究委託事業 (外国人留学生の就職及び定着状況に関する調査) 報告書」 [http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/global/pdf/H26\\_ryugakusei\\_report.pdf](http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/global/pdf/H26_ryugakusei_report.pdf) (2016年9月19日アクセス)
- 鈴木寿子・トンプソン 美恵子 (2013) 『グローバル化社会を生きるための力を育成する授業—持続可能性日本語教育に基づいた授業デザインと成果—』 平成23～25年度科学研究費補助金若手研究 (B) 「共生社会の構築に資する持続可能性日本語教育としての日本語教員養成プログラムの開発」 研究代表者 鈴木寿子 課題番号 23720260 平成24～26年度科学研究費補助金若手研究 (B) 「学習者とともに学ぶ持続可能性日本語教育教員養成プログラムの構築」 研究代表者 トンプソン美恵子 課題番号 24720231 成果報告書
- 芹沢真五 (2012) 「留学生受け入れと高度人材獲得戦略—グローバル人材育成のための戦略的課題とは」『留学交流』 10, 1-14.
- 内閣府 (2009) 「外国人高度人材受入政策の本格的展開を (報告書)」平成21年5月29日高度人材受入推進会議報告書 <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/jinzai/dai2/houkoku.pdf> (2016年9月19日アクセス)
- 日本経済団体連合会 (2015) 「グローバル人材の育成・活用に向けて求められる取り組みに関するアンケート結果」 [http://www.keidanren.or.jp/policy/2015/028\\_honbun.pdf](http://www.keidanren.or.jp/policy/2015/028_honbun.pdf) (2016年9月19日アクセス)
- 文部科学省 (2016) 「外国人留学生の就職促進について (外国人留学生の就職に関する課題等)」日本学生支援機構 平成28年度全国キャリア・就職ガイダンス 配布資料 [http://www.jasso.go.jp/sp/gakusei/career/event/guidance/\\_icsFiles/afieldfile/2016/06/29/12\\_h28guidance\\_ryugakuseission\\_monkasyou.pdf](http://www.jasso.go.jp/sp/gakusei/career/event/guidance/_icsFiles/afieldfile/2016/06/29/12_h28guidance_ryugakuseission_monkasyou.pdf) (2016年9月19日アクセス)
- 湯浅誠 (2010) 『どんとこい、貧困!』 理論社

(とんぷそん みえこ, 早稲田大学日本語教育研究センター)